

## 『伊勢物語』教材研究

### ——第9段「東下り」の和歌解釈を中心に——

西 一 夫

#### 1. はじめに

高等学校の国語科教材，なかでも古典分野の教材は固定化が図られ，現代文分野での「定番教材」とされる教材と較べても，固定化の比率は高い。なかでも1年次で多くの学校が必修とする「国語総合」では，古典分野の教材の固定化が進んでいるようである。「国語総合」（10社20冊）の古典分野全体を網羅的に調査された杉村修一氏によれば，教科書での採用率が50%を超える教材は，古文教材の延べ数784のうち22であるという<sup>1)</sup>。杉村氏も述べるように，22の教材は高等学校における現行教科書が扱う最もポピュラーな作品であると言える。これらの中でさらに高い比率を示すのは，『伊勢物語』第6段（芥川）と第9段（東下り），さらに『徒然草』序段の3作品であり，採用率がいずれも70%を示している。『徒然草』序段は中学校でも取り上げられる作品<sup>2)</sup>であるのに対して，『伊勢物語』は高等学校で初めて取り上げられる教材である。これらの状況を考慮するならば，『伊勢物語』は高等学校で初めて登場し，かつ古文分野ではよく知られた教材と言えるだろう。

古文教材としての『伊勢物語』は，物語教材として『竹取物語』に続いて取り上げられる傾向にある。『竹取物語』や随筆・説話などの学習を通して身につけてきた古文を読む能力を，さらに深めるための教材として『伊勢物語』は位置付けられると言える。なぜなら，『伊勢物語』では既習教材と異なり，和歌の解釈が作品理解に重要な位置を占めているからである。

こうした教材での和歌の学習，なかでも和歌の修辞に対する学習では高度な言語運用に対する理解が求められ，その上『伊勢物語』では物語の内容と和歌が緊密な関係をなす（後述）。それほどまでに和歌が重視されながらも，単元構成は修辞に対する配慮が十分になされていない状況にある。これは教材の配列や単元構成にも関わる問題として考えられなくてはならない。『伊勢物語』は，多くの高校生が学習する教材であるだけに，これまでも実践が報告され議論が深められている教材である。だが，本文や和歌の理解については，文学史的な観点から捉え直せば，なお組上に載せるべきものがあるように考えられる。

本稿では，『伊勢物語』の第9段「東下り」がどのように教材化されているのか，さらには教材としての位置付けや和歌を含む教材としての問題点を中心に考察をおこなう。

## 2. 教材としての『伊勢物語』

### 2-1. 教科書所載状況

現行の「国語総合」に所載される『伊勢物語』は、次の9つの章段である（章段の後に示した数字は採用冊数）。

第4段（月やあらぬ）：1      第6段（芥川）：13      第9段（東下り）：15  
 第23段（筒井筒）：11      第24段（梓弓）：3      第40段（好けるもの思ひ）：1  
 第83段（小野の雪）：1      第84段（さらぬ別れ）：3      第125段（つひにゆく道）：1

前項で述べたように、第6段（芥川）と第9段（東下り）の突出ぶりがうかがえる。2つの作品の採用率に続く第23段（筒井筒）も採用率（55%）は落ちるものの、他の章段とは歴然とした差が認められる。その他の章段は、これら3つの章段（第6段・第9段・第23段）を核として『伊勢物語』教材として構成される。さらにこれらの章段は、各社の教科書構成にも関わるのだが、おおよそ1頁から2頁、あるいは3頁で教材化できる分量である。そうしたなかで第9段（東下り）と第23段（筒井筒）は長文の教材といえる。各教科書<sup>③</sup>の所載状況は〔表1〕に示したようになる。

〔表1〕教科書所載章段一覧

教科書番号	所 載 章 段	教科書番号	所 載 章 段
001	6 段	013	9 段、23 段
002	6 段、9 段、23 段	014	なし
004	6 段、9 段、23 段	015	6 段、9 段
006	6 段、9 段、125 段	017	6 段、9 段、23 段
007	6 段、84 段	018	23 段
008	6 段、9 段、23 段、84 段	019	6 段、9 段、23 段
009	4 段、9 段	020	9 段、23 段
010	9 段、23 段、24 段	021	9 段、23 段
011	6 段、23 段	022	6 段、9 段、24 段、83 段、40 段
012	6 段、9 段、84 段	024	6 段、9 段、24 段、40 段、83 段

〔014〕のように、教材として『伊勢物語』を採用していない教科書が存するけれども、『伊勢物語』は高等学校古文の入門期に学習する新規の作品であると捉えてよいだろう。なお、核となる3つの章段のいずれもを所載していない教科書は、『伊勢物語』を採用していない〔014〕の1冊のみである。

また、『伊勢物語』が教材化される場合、組み合わせられる他の教材や単元設定による教科書での配置が問題となる。結果は〔表2〕のようになる。

単元の設定位置としては古文分野の第3単元が最も多い。教科書での単元総数にもよるが、おおよそ入門としての説話・昔話を取り上げる第1単元、第2単元は随筆や日記で構成されるのが標準的と考えられる。随筆と組み合わせられて第2単元に設定されている〔008〕は『徒然草』の位置付けを重視した設定と言えるだろう<sup>④</sup>。各教科書における古文単元の平均が5単元であるこ

[表2] 単元数・単元名・併載作品一覧

教科書番号	単元	単元名	併載作品	教科書番号	単元	単元名	併載作品
001	4	物語を読み比べる	更級	013	3	歌物語と日記	更級
002	4	歌物語	—	014	3	[物語]*4	竹取のみ
004	5	物語	竹取	015	3	物語と軍記	大和・平家
006	4	物語	—	017	2	物語と日記	竹取・土佐・更級
007	3	物語	—	018	4	物語(1)	—
008	2	随筆と歌物語	徒然草	019	2	物語を楽しむ	竹取
009	3	物語	竹取	020	4	物語を楽しむ	平家
010	3	物語・日記	土佐	021	3	物語を楽しむ	—
011	3	物語の世界	平家	022	3	物語と軍記	平家
012	3	歌物語と和歌	和歌20首	024	3	軍記と物語	平家

とからすれば、『伊勢物語』は古文の文体に慣れて基本的な文法事項を学習し、ある程度の分量を読みこなせる段階で学習する作品と位置付けられる。

ただし、見逃してならないのは『伊勢物語』の単元と「詩歌(和歌)」単元との位置関係であろう。現行の「国語総合」の中で、『伊勢物語』を収める単元よりも「詩歌(和歌)」単元を前に設定するのは[001]のみである。たしかに、「詩歌(和歌)」単元以前に韻文を扱う作品は「国語総合」の場合、『土佐日記』と『伊勢物語』であり、和歌修辞の理解が大きく問われるのは、『伊勢物語』第9段の「東下り」以外にはほとんどないと言ってよい。本格的な古文学習に臨む生徒は和歌を詠んだり鑑賞する機会が日常生活ではほとんどなく、その上、和歌の修辞は日常の言語生活と乖離している。このような言語環境で生活する多くの生徒にとって和歌の修辞はもとより馴染みがなく難解との印象を持たせることになる。それゆえ、示された和歌の口語訳を丸暗記し、修辞も機械的に覚えるという状況を生み出す。

和歌修辞の本質的な部分を問題とせず、表層のみを学習するだけでは、和歌が重要な意思伝達手段として長い年月にわたって用いられ続けて『伊勢物語』のような歌物語が創られたのかに進まることができず、作品の読みを深めることにはつながらない。さらになぜ修辞を盛り込む必要があるのかを十分理解することにはつながっていかないだろう。和歌という1つの文芸が作り出す「あや」は散文表現にも影響を与えており、修辞技巧も同様な傾向にあることが、すでに指摘<sup>6)</sup>されているのである。

## 2-2. 和歌修辞の解説と『伊勢物語』

教材として用いられる作品に和歌修辞が関わる場合、その修辞については「詩歌(和歌)」単元で解説されるか、付随するコラム欄あるいは脚注で解説されるのが一般であろう。「国語総合」では「詩歌(和歌)」単元が物語よりも後に設定される傾向にあり、和歌の修辞を本格的に学習する機会は『伊勢物語』を学習した後になる<sup>7)</sup>。

和歌の修辞を学習する機会は「詩歌(和歌)」単元が中心となるが、先取りの形で『伊勢物語』

〔表3〕和歌修辭解説状況

番号	単元	枕詞	序詞	掛詞	縁語	擬人法	見立て	本歌取り	体言止め
001	3	○	○	○	○	—	—	○	—
002	5	○	○	○	○	○	○	○	○
004	6	○	○	○	○	○	○	○	○
006	6	○	○	○	○	—	—	○	○
007	5	○	○	○	○	—	—	—	—
008	3	○	○	○	○	—	—	○	○
009	4	○	○	○	○	—	—	○	○
010	5	○	○	○	○	—	—	○	○
011	4	○	○	○	○	—	—	○	○
012	3	○	○	○	○	○	○	○	○
013	4	○	○	○	○	○	○	○	○
014	—	—	—	—	—	—	—	—	—
015	4	—	—	—	—	—	—	—	—
017	4	—	—	—	—	—	—	—	—
018	2・3	—	—	—	—	—	—	—	—
019	5	—	—	—	—	—	—	—	—
020	5	—	—	—	—	—	—	—	—
021	—	—	—	—	—	—	—	—	—
022	4	○	○	○	○	—	—	○	○
024	4	○	○	○	○	—	—	○	○

第9段で学習する場合が生じる。いうまでもなく、このような理解は第9段「東下り」の「からころも」の歌に多くの修辭が凝らされている点に拠るからである。そうした和歌修辭の取り扱い状況について、コラム欄などで取り上げられる修辭の種類、さらに「詩歌(和歌)」単元の設定状況を示せば〔表3〕のようになる。

教科書によっては単元が設けられていながら和歌修辭に関する説明が十分におこなわれていない場合もある(015, 017, 018, 019, 020)。また「詩歌(和歌)」単元自体が設けられていない教科書も2冊<sup>㉒</sup>ある。〔表3〕を先掲〔表1〕と重ね合わせてみるならば、[015] [017] [019] [020] [021] の5冊では第9段を取り上げながら、和歌修辭に関する解説が教科書に記載されていないことになる。この場合は教科書の各教材に付された脚注と国語便覧などを併用しながら和歌修辭を学習することになるのであろう。

しかも和歌修辭の使用度から見た「からころも」の歌は、『伊勢物語』のみならず、『古今和歌集』の在原業平関係歌に照らしても突出する状況にある<sup>㉓</sup>。

そうした「からころも」の歌の修辭に対する教科書脚注での解説は〔表4〕のような状況にある。和歌修辭として共通しているのは、序詞・掛詞・縁語・折句であり、「からころも」を枕詞として認めるか否かの違いがあるだけにすぎない。これらの和歌修辭は、折句を除けば基本的なものであり、和歌を理解する際に欠かせない事柄といえよう。しかしながら、和歌修辭の学習として「からころも」の歌が教材として最適であるかは、なお検討すべきであらう。つまり、取り扱う教材に和歌があるからといって、それが修辭を学習するための学習材として最適であるとは限らないからである。

〔表4〕「唐衣」歌修辭解説一覧

番号	枕詞	序詞	掛詞	縁語	折句
002	—	○	○	○	○
004	—	○	○	○	○
006	○	○	○	○	○
008	○	○	○	○	○
009	○	○	○	○	○
010	—	○	○	○	○
012	—	○	○	○	○
013	—	○	○	○	○
015	○	○	○	○	○
017	○	○	○	○	○
019	○	○	○	○	○
020	○	○	○	○	○
021	○	○	○	○	○
022	—	○	○	○	○
024	—	○	○	○	○

和歌修辞を学習するために「からころも」の歌が適しているか否かを吟味する前に今一度確認しなければならないのは、先掲〔表 4〕のごとく、この和歌は修辞使用度が突出する存在としてあることである。このような和歌を教材としてどのように位置付けようとするのか。教材の学習課題（手引き）から、教科書での傾向を概観しておきたい。

①「からころも」の歌に込められた心情を確認する：〔006〕〔008〕〔009〕〔013〕〔019〕〔020〕〔021〕〔022〕〔024〕

②修辞技巧を確認する：〔010〕〔012〕

③「からころも」の歌の優れた点：〔002〕〔004〕

④和歌が詠まれるのは、どのような状況なのか：〔015〕〔017〕

多くの教科書で「からころも」の歌を学習する際に掲げる学習課題は、和歌に詠み込まれている男の心情を理解することである。さらに踏み込んで「旅の心」と関わらせて理解を深めようとする教科書もあり（022, 024）、このような課題設定は第 9 段で詠まれた 4 首の和歌全体に関わる問題をはらむ（後述）。ただし、修辞技巧の理解を明確に学習項目とする教科書は少ないものの、「からころも」歌の優れた点を考える学習（002, 004）では、和歌に用いられた修辞を活かして、そこに込められた思いを和歌から読み解くことを求めていると言えるだろう。

多くの教科書が学習課題とする「からころも」の歌に込められた心情理解は、用いられている修辞の理解なくしては達成されない。和歌修辞を学習することが主たる目的ではないにしても、その修辞が理解できなくては、「歌物語」としての『伊勢物語』の内実・本質には迫れないのではないのか。

ならば、修辞使用が突出する「からころも」の歌に用いられている修辞を、今一度吟味して個々の修辞が「からころも」歌にどのような意味を有しているのか、さらには『伊勢物語』第 9 段を教材として取り上げるに際して留意すべき点は何であるのかを検討する。

### 3. 第 9 段「東下り」の吟味

#### 3-1. 「からころも」歌に用いられた修辞

教科書教材として『伊勢物語』を代表する章段の 1 つ「東下り」は、大きく 3 つの場面から成り立つ。全体を概観するために全文を以下に示す。なお論述の関係で平安朝の和歌は全て平仮名清音表記とした。

むかし、をとこありけり。そのをとこ、身をえうなきものに思ひなして、「京にはあらじ、東の方に住むべき国求めに。」とて行きけり。もとより友とする人、一人二人して行きけり。道知れる人もなくて、惑ひ行きけり。

三河の国八橋といふ所に至りぬ。そこを八橋と言ひけるは、水ゆく川の蜘蛛手なれば、橋を八つ渡せるによりてなむ、八橋と言ひける。その沢のほとりの木の陰に下り居て、乾飯食ひけり。その沢にかきつばたいとおもしろく咲きたり。それを見て、ある人のいはく、「かきつばた、といふ五文字を上句に据ゑて、旅の心を詠め。」と言ひければ、詠める。

からころも きつつなれにし つましあれは はるはるきぬる たひをしそおもふ  
と詠めりければ、みな人、乾飯の上に涙落として ほとびにけり。

行き行きて駿河の国に至りぬ。宇津の山に至りて、わが入らむとする道はいと暗う細きに、つた、かへでは茂り、もの心細く、すすろなるめを見ることと思ふに、修行者会ひたり。「かかる道は、いかでかいまする。」と言ふを見れば、見し人なりけり。京に、その人の御もとにとて、文書きてつく。

するかなる うつのやまへの うつつにも ゆめにもひとに あはぬなりけり  
富士の山を見れば、五月のつごもりに、雪いと白う降りり。

ときしらぬ やまはふしのね いつとてか かのこまたらに ゆきのふるらむ  
その山は、ここにたとへば、比叡の山を二十ばかり重ねあげたらむほどして、なりは塩尻のやうになむありける。

なほ行き行きて、武蔵の国と下つ総の国との中にいと大きな川あり。それをすみだ川と言ふ。その川のほとりに群れ居て、思ひやれば、限りなく遠くも来にけるかな、とわびあへるに、渡し守、「はや舟に乗れ、日も暮れぬ。」と言ふに、乗りて渡らむとするに、みな人ものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さる折しも、白き鳥の、嘴と脚と赤き、鳴の大ききなる、水の上に遊びつつ魚を食ふ。京には見えぬ鳥なれば、みな人見知らず。渡し守に問ひければ、「これなむ都鳥。」と言ふを聞きて、

なにしおはは いさこととはむ みやことり わかおもふひとは ありやなしやと  
と詠めりければ、舟こぞりて泣きにけり。

「からころも」の歌に用いられている和歌修辞は、最大で枕詞・序詞・掛詞・縁語・折句の5つである。以下の考察では修辞が重複する初二句「からころも きつつなれにし」に関わる枕詞・序詞・折句を取り上げる。

#### ①：折句「かきつばた」

東国を目指して旅立った「をとこ」一行がやって来た三河国の八橋なる土地。そこで詠まれた「からころも」の歌については、近時、小松英雄氏が新たな表現解析をおこなっておられる<sup>100</sup>。小松氏はこれまで研究を重ねてこられた仮名表現の分析方法を「からころも」の歌にも適用して、従来おこなわれてきた和歌修辞に対する再検討や、この和歌に詠まれている「旅の心」とはどのような心であるかをあきらかにされようとしている。そうした表現解析の過程では「かきつばた、といふ五文字を上句に据ゑ」という「折句」が再検討の対象となっている。「からころも」の歌と同様に「折句」を用いた和歌は、小松氏がすでに確認しているように、『古今和歌集』では他に次の1首にとどまる。

朱雀院の女郎花合の時に、をみなへしといふ五文字を、句のかしらにおきてよめる

つらゆき

をくらやま みねたちならし なくしかの へにけむあきを しるひとそなき (物名・439)

詞書で明言するように「をみなへし」を句頭に据えた和歌である。この和歌では「折句」の他に修辞は認められず、「物名」<sup>101</sup>に分類されていることからすれば、「折句」を用いていることが歌集編纂の際に重視された配置と理解できる。かたや「からころも」の歌が巻9「羈旅」(410)におさめられたのは、和歌に付された次の詞書から明らかである。

あづまの方へ、友とする人ひとりふたりいざなひていきけり。三河の国八橋といふ所にいたれりけるに、その河のほとりに、かきつばたいとおもしろく咲けりけるを見て、木のかげにおりゐて、「かきつばたといふ五文字を句のかしらにすゑて、旅の心をよまん」とてよめる。つまり、この和歌は作者在原業平が「旅の心」を主題として詠んでいると撰者は認めたのである。

また、昌泰元(898)年の宇多上皇が主催した「亭子院女郎花合」<sup>(12)</sup>開催に際して詠まれながら、歌合には出されなかった和歌では「をみなへし」を「折句」にした作品がある。

これはあはせぬうたども

これはかみのかぎりにすゑたる

をのえは みなくちにけり なにもせて へしほとをたに しらすさりける

をせきやま みちふみまかひ なかそらに へむやそのあきの しらぬやまへに

これはそのひ、みなひとびとによませたまふ

をとこやま みねふみわけて なくしかは へしとやおもふ しひてあきには

をくらやま みねのもみちは なにをいとに へてかおりけむ しるやしらすや

この歌合関係歌では他にも「をみなへし」を句頭と句末に据えた作品(沓冠歌)<sup>(13)</sup>が残されている。歌合それ自体が遊戯性を内包した和歌創作の場<sup>(14)</sup>であっても、「これはあはせぬうたども」の注記からすれば、実際の歌合にこれらの作品があわされたとは言えない。だとすれば、これらの和歌では歌合の主題「をみなへし」を詠むに際して、遊戯的な技巧を凝らす手段として「折句」を用いているにすぎないのであろう。この「をみなへし」を「折句」にした和歌には「これはそのひ、みなひとびとによませたまふ」<sup>(15)</sup>の注記が存することからして、歌合の余技として詠まれた作品であり、歌の主題と「をみなへし」とが有機的に関連するとは思われない。

これらの歌合に『古今和歌集』の仮名序に記された延喜五(905)年という時代を考慮すれば、当時の「折句」に対する理解は非常に遊戯性の高い和歌修辞であったと推察される。先掲の『古今和歌集』「物名」におさめられた和歌も、詞書の内容からすれば上記の歌合と関連し、やはり遊戯性を重視した詠作態度であったと捉えるべきだろう。

だとすれば、「旅の心」を詠むことが主題として定められている「からころも」の歌にも、「折句」によって醸し出される遊戯性は感じ取られてよいはずである。『古今和歌集』では撰者の理解によって旅を主題とする作品と位置付けられているにすぎないのであり、『伊勢物語』所載の和歌に同一の理解を求める必要はないだろう。

「折句」を用いていることから感じ取られる遊戯性は「物名」歌全体に存する。その先駆的存在としては、『萬葉集』巻16にみられる「数種の物を詠む」歌(3824, 3833など)があり、作品創作の場として宴席が想定されている<sup>(16)</sup>。そうした遊宴での座興として、即興で巧みに歌を詠むことが求められていたのであろう。

第9段においても都を出立する一行は失意のなかで東国へと向かうものの、「その沢のほとりの木の陰に下り居て、乾飯食ひけり」と食事のために八橋で休憩を取る設定となる。その川端に「かきつばた」が咲き誇っているのを契機として、「旅の心」を主題とする和歌を詠むように促される。「折句」題として「かきつばた」が選ばれたのには、物語設定上の作為<sup>(17)</sup>があるにしても、この場面には「物名」歌が創作される場と類似した状況が構えられているといえるのではないか。物語冒頭の悲壮感を漂わせた雰囲気は、場面の描写からは感じられないのである。

また「折句」に用いられた「かきつばた」は、『萬葉集』では、

常ならぬ 人国山の 秋津野の かきつはたをし 夢に見しかも (7・1345・譬喩歌)

住吉の 浅沢小野の かきつはた 衣に摺り付け 着む日知らずも (7・1361・譬喩歌)

など、女性をなぞらえた寓喩の作品が残る。他にも恋情を込めた作品として、

我れのみや かく恋すらむ かきつはた 丹つらふ妹は いかにかあるらむ

(10・1986・夏相聞)

かきつはた 佐紀沼の 菅を 笠に縫ひ 着む日を待つに 年ぞ経にける (11・2818・問答)  
のごとき例も挙げられる。いずれも女性の姿を想起させる作品であり、「かきつばた」には女性の姿が印象付けられている。このような和歌素材の延長上に「からころも」の歌が位置付けられるのであれば、眼前の花として「かきつばた」が選取り取られてきたのには、相応の意味が存するといえる。

## ②：枕詞「からころも」

初句に詠まれた「からころも」を枕詞と理解するのは、第9段採用教科書15冊のうち8冊である(〔表4〕参照)。この表現が枕詞と認められる古い例としては、『萬葉集』におさめられた次の短歌があげられる。

雁がねの 来鳴きしなへに からころも たつたの山は〔裁田之山者〕 もみちそめたり

(10・2194・秋雑歌)

「からころも」は、続く「たつ」が衣を「裁つ」と「龍(田山)」の掛詞として上二句の内容から下二句の内容が導き出されている。また平安朝の例でも、次に示すように掛詞(衣を「裁つ」からの掛詞)を介して歌の主意に展開していくのを基本とする。

からころも たつひはきかし あさつゆの あきてしゆけは けぬへきものを

(古今集・離別・375,「裁つ」と「発つ」の掛詞)

からころも たつたのやまの もみちはは ものおもふひとの たもとなりけり

(後撰集・秋下・383,「裁つ」と「龍田山」の掛詞)

第9段の「からころも」の歌のように「着」と関わる用例は、類似した修辞関係も含めて、次のような作品が残るのみのようである。

しのひつつ よるこそきしか からころも ひとやみむとは おもはさりしを

(拾遺集・雑恋・1225)

第二句末「きしか」が「来しか」と「着しか」の掛詞として「からころも」に続く表現である。「からころも」については、片桐洋一氏が「実体は知られぬままに「衣」に縁のある語を導き出す装飾表現の鍵(キイ)としての役割を果たすようになっているのである」<sup>(18)</sup>と指摘するように、具体的な修辞と密接に結びついた表現と限定しては捉えきれない広がりを持つ。修辞として「からころも」が用いられる場合には、すでに確認したように掛詞(「たつ」)を介して被枕詞にかかる傾向が強い。この点を勘案するならば『伊勢物語』第9段の「からころも」は「をとこ」が身にまとう「衣」に対する装飾表現と捉えておくのが穏やかなのではあるまいか<sup>(19)</sup>。



### ③：序詞「からころも きつつ」

第9段所載すべての教科書で取り上げる和歌修辭の1つに、上二句（からころも きつつ）の序詞があげられる。

序詞は枕詞との類似性から説かれる場合が多いものの、修辭の特性が教材では十分に説明されていないのが現状のようである。例えば、国語便覧では序詞を次のように解説している。

a：枕詞の古い形といってよく、比喩や掛詞・同音語などの関係で下に係る。枕詞よりも内容的に複雑な表現効果で、意味でつながる「有心の序」と、発音でつながる「無心の序」がある。（『最新国語便覧』浜島書店）

b：枕詞と機能は同じであるが、一句からなる枕詞とは違って、長いものである。掛かる言葉も枕詞のように一定せず、自由に修飾できるため、和歌に複雑な効果を与える。『万葉集』によく使われている。（『新訂総合国語便覧』第一学習社）

いずれもが枕詞と比較することで序詞の解説としている。枕詞との比較から明らかになる序詞の特性は「内容的に複雑な表現」ができ、「自由に修飾」することを可能にしている点であろう。しかし、これらの解説は序詞の基本的な特性を十分に示しているとは言い難いようである。和歌関連の辞典では、次のような解説がなされている。

和歌の修辭法の一つ。ふつう一首の中のあることばをより印象的に呼び起こすための修飾語句と説かれるが、一首全体としてみれば、ある景物を提示しそれに寄せて心情を表出する心物融合の修飾表現にとらえるべきであろう。枕詞と機能的には変わらないが、音数に制限がなく二句以上に及び、つねに具体的内容を伴って自由に創作しうる点に違いがある。（中略）序詞は発生的には、即境的景物ないしは属目の景物を提示してそこから陳思部に転換して行くという、集団的な場における発想法であり、それがしだいに心情の寄物陳思的表現形式として用いられるようになり、やがて個人の叙情的な表現技術として洗練され、修辭法として確立して行ったものと考えられている。（『和歌大辞典』「執筆：大久保広行氏」明治書院）先掲の国語便覧と比較した場合、記述されていないのは「ある景物を提示しそれに寄せて心情を表出する心物融合の修飾表現」と「即境的景物ないしは属目の景物を提示してそこから陳思部に転換して行く」ことであり、これは序詞の根幹であり特色である。このような序詞の特性を有する和歌を教材化された『伊勢物語』で示せば、第23段「筒井筒」にある次の一首ではないか。

かせふけは おきつしらなみ たつたやま よはにやきみか ひとりこゆらむ

初二句が序詞として機能し、第三句の「たつ」が「立つ」と「龍（田山）」の掛詞として陳思部へと転換していくのである。沖に白波が立つほどに風が強く吹き荒れ、その風が吹き付ける龍田山の夜道をたった一人で越えていく男の寂しさと心細さを送り出した女が思いやり歌に詠む。序詞が掛詞を介して陳思部に転換するためののみ機能しているのではなく、陳思部の内容を一層豊かに表現することと緊密に関係しているといえよう。また次の短歌の序詞も、その特徴をよく示している。

み熊野の 浦の浜木綿 百重なす 心は思へど 直に逢はぬかも

(萬葉集4・496, 柿本人麻呂)

初二句が序詞となる例である。この序詞では外海に直接する熊野の浜に打ち寄せる白波を印象的に表現している。その白さを際立たせる存在として「浜木綿」が選び取られ、白波の力強さと絶えることなく寄せる白波に相手を思い続ける心情を重ねるという、逢わざる恋の心情を詠んだ一首との理解にしたがうべきだろう<sup>(20)</sup>。

第9段の「からころも」の歌の初二句が、これらの序詞の特質を備えているか否かをあらためて検討する必要がある。『和歌大辞典』の記述にもあるように、序詞は寄物陳思の表現形式を基本とするのであるから、序詞には即境的景物あるいは属目の景物を提示して陳思部へと転換する機能が求められる。「からころも」の歌では初二句に示されている内容は「からころも」であり、先に示した序詞に取り上げられている要素が自然の景物を基本としていることからすれば、即興的な詠作で取り上げる属目の景物とは十全に対応していないのではないか。属目の景物である「かきつばた」は折句題としてすでもちいられており、「かきつばた」以外に印象的な景物は描写されていないのではないか<sup>(21)</sup>。しかも現行の注釈書でも初二句を序詞とするか否かは、なお判断がわかれている<sup>(22)</sup>。加えて小沢正夫氏は『古今和歌集』の修辭を調査されて「序詞は古今集時代には衰え始めた修辭だといわれるが、六歌仙時代に減少し、撰者時代にまたふえている」<sup>(23)</sup>という結果を得ている。また『古今和歌集』所載の在原業平の関係歌についても同様な傾向にあり、主要な注釈書でも序詞を用いていると理解している作品は、「からころも」の歌の他には見られないようである。和歌修辭としての序詞は撰者時代に見直され、掛詞や縁語とも関わって『古今和歌集』における序詞の1つの到達点を示す。だが六歌仙時代の在原業平に仮託される「をとこ」がいくつもの修辭を用いていると理解するのは、時代の展開からもお違和感を感じさせるのではないか。

このような状況にある「からころも」の歌は、序詞を学習する教材としてはやはり適切ではなからう。散文・韻文を問わず修辭の学習は、その典型的な教材でもっておこなわれるべきなのである。

和歌修辭は歌風の変遷と関わりを持つ。そうした文学史的な観点から教材を捉えて活用することで生徒の十全な理解が可能となり、学習効果が期待できる。三大集（萬葉集・古今和歌集・新古今和歌集）の学習として和歌を学習する際には、歌集を比較することで、それぞれの修辭などの特徴を明らかにしようとする。しかしながら、対比を明確にしようとするあまり、内容を簡潔化しすぎて作品から歌集の特徴へと帰納できない場合や逆に歌集の特徴を個々の作品にあてはめてしまいがちになる。

「からころも」の歌についても枕詞と序詞の2つの修辭は、文学史的な観点からすれば和歌理解に有用であるか否かが問題となるのだろう。換言すれば、「からころも」の歌を詠むにあたって求められた「旅の心」という主題は、これら2つの修辭がなくては達成されていないのかを、次に吟味しなくてはならない。

### 3-2. 「からころも」歌の主題—「旅の心」・歌物語—

第9段の第1部三河国で詠まれた「からころも」の歌の主題「旅の心」がどのように実現されているのか、さらに主題の達成に対して初二句に用いられている修辞の効果について検討してみたい。

東国への旅がいかなる理由によるのか、物語では明確に述べられていない。だが第9段前後の章段を読み合わせて、折句に「かきつばた」が取り上げられ、さらには助動詞の用法に留意しながら、紫のイメージを持つ高貴な女性との恋が果たされずに、その傷心を癒すためとの理解<sup>(24)</sup>がある。恋の傷心のために旅に出たのであるならば、作歌に際して与えられた「旅の心」は、まさにその点に即して表現されているはずである。今「旅」にある心境を和歌に仕立てているのであれば、下二句の「はるはるきぬる たひをしそおもふ」に「をとこ」の心情はもっともよく表現されていると思われる。

「はるはるきぬる」は「からころも」との縁語から「(衣を洗い) 張る張る着ぬる」の意味が喚起され、主題の「旅」からは「遙々来ぬる」と都を遠く離れてやって来た感慨が込められている。後ろ向きの姿勢が「旅」に存するのであれば、小松英雄氏が指摘するごとく、仮名の多重表現として「(萎えた心を) 張る張る来ぬる」を想定することは十分に可能であろう<sup>(25)</sup>。

このような理解に拠るならば、「をとこ」の心情を癒すための旅であることが第9段の第1部で和歌によって宣言されていると捉えられよう。この宣言を受けて、第9段は物語を展開させ、以下の物語で詠まれる和歌にも同様な意識を読み取ることができるのではあるまいか。その点では、森野宗明氏が「漸層法的手法」<sup>(26)</sup>として第9段の和歌(4首)を把握しておられるのは貴重な指摘である。それだけに和歌の役割は大きく「歌物語」の代表として位置付けられるのも意味あることである。

『伊勢物語』が文学史ジャンルで「歌物語」に位置付けられ、教科書の単元名にも「歌物語」が立てられている状況(〔表4〕参照)は、和歌の位置付けを重視していることの現れである。そうした「歌物語」の特徴は、次のようにまとめられる。

歌は原則的にその物語作者によって作られたものではない。すでに物語の成立以前に実在の人物によって作られた歌があり、その歌を中心に人々によって語られた歌語りがあった。多くはその歌語りをもとにして歌物語は成っている。したがって物語の中心はあくまでも歌にあり、歌によって事件は展開し、クライマックスに達し、あるいは結末に導かれる。最も大事なところに歌があるわけで、歌がなければ、原則としてその物語は成り立たない。

(『和歌大辞典』「執筆：久保木哲夫氏」明治書院)

歌があつてはじめて物語が展開し成立するならば、「からころも」の歌は八橋の場面を集約する機能を持つと同時に物語全体の主題を宣言していると考えられよう。そのような解釈に掛詞・縁語・折句の修辞が和歌の解釈で有効に機能しているといえるものの、初二句の枕詞・序詞は装飾表現としては具体性を持たせながらも、同時代的な修辞傾向から見れば必要に迫られているとは言い難いように思われる。掛詞・縁語を多用するのは新しい時代傾向にあり、その上、折句を用

いていることで緊迫した状況よりも、遊戯性を前面に押し立てていると捉えられる。

以上のように、和歌修辞の問題を中心に「からころも」の歌に検討を加えてきた。小松英雄氏が注意を促すように、平安初期の和歌に対して後世に確立してくる和歌修辞の概念をあてはめての理解には注意しなければならない。それぞれの時代状況（＝文学史的展開）を踏まえた理解が求められる。

個々の和歌が十全に理解されると同時に、先掲の「歌物語」の解説でも指摘されているように、第9段全体として4首の和歌がどのように機能しているのか。章段の主題と和歌の関わりについて、さらに考察をおこなう。

#### 4. 第9段「東下り」の和歌

##### 4-1. 「ときしらぬ」歌の位置付け

三河国から旅を続けて次の舞台に設定されているのは駿河国である。この場面では2首の和歌が詠まれ、そのなかの「ときしらぬ」は他の3首と比較して物語全体の「旅の心」を詠み継いでいくという展開になじまないと理解される傾向にある。学習課題でも「四首の歌の中で最も叙景歌に近い歌はどれか、また、他の三首の歌に共通する思いはどのような思いか、考えてみよう」<sup>107</sup>という設定から、「ときしらぬ」の歌が叙景歌の要素の強い作品と理解され、他の三首とは一線を画すとの認識がある。

たしかに、「ときしらぬ」の歌は他の三首と異なり、直接的に「旅の心」を詠んでいるとは言い難い。『伊勢物語』全体から見ると、第9段と関連する章段（7段・8段）の和歌の中で同様な傾向にあると考えられているのが第8段の和歌である。

むかし、をとこありけり。京や住み憂かりけむ、あづまの方に行きて住み所求むとて、友とする人ひとりふたりして行きけり。信濃の国、浅間の嶽にけぶりの立つを見て、

しなのなる あさまのたけに たつけふり をちこちひとの みやはとかめぬ

いずれもが山を主題とし、五月のつごもりに雪のある富士は「ときしらぬ」存在として、また浅間は煙をあげる存在としてある。この2首に対して山本登朗氏が「「東下り」の物語・その1—浅間と富士—」<sup>108</sup>で考察をおこない、次のような結論を示しておられる。

主人公は、「都」の理念の立場から、理念にはずれたものとして「ゐなか」の山たる浅間・富士の両山を捉え、その有様をいぶかしんでいるのであって、そのいぶかしみの背後には、都を出て「ゐなか」を「まどひ」（九段）ゆき、「都」の理念のおよばない「ゐなか」の世界と自ら対面せねばならなかった主人公の心のいたみが、それなりに深くこめられていた。都から離れてある事の悲しみは、他の四首ばかりでなく、この両詠をもやはり貫いて流れていたものであり、そうである以上、両詠も又、「東下り」の基調にはずれる例外では決してなかったと言えるのである。

異質感を感じさせる和歌ではなく、章段全体の主題に即して位置付けられる作品との理解を示す。つまり、「ときしらぬ」の歌を除外して章段の主題が存立するのではなく、全ての和歌が「旅の

心」を詠む主題のもとで構成されていると見通すのである。和歌の理解に焦点を絞り、物語の展開を追うことによって第9段「東下り」の主題は把握できるのである。「歌物語」として、章段の主題を和歌自体が内包し展開させているといえる。

#### 4-2. 和歌の展開と主題

第9段で詠まれる4首の和歌は並列的に存するのではなく、やや心に余裕を持ちながら、遊戯性を感じさせる第1首の「からころも」の歌。この和歌には六歌仙時代に修辭として大きく発展する掛詞・縁語、さらには遊戯性を醸す折句を用いている。つづく第2首「するかなる」では、序詞の典型的な形式の1つである景物から心情へと同音の繰り返しを用いて都にいる人を思いやる心情を表明する。第3首では自らが置かれている状況を確認し、都から離れてある悲しみを表現している。最後の第4首は「都鳥」を登場させて都への心情を、さらには都にいる人を直截的に詠み込んでいる。

4首の和歌はそれぞれの場面を集約する役割を担いながら、最後の隅田川の場面に向けて修辭を用いた技巧的な和歌から心情を直截的に表現する和歌へと展開させていると捉えることができる。その際、散文部分の対比関係にも留意すれば八橋での涙を流して乾飯が「ほとぶ」表現から隅田川での「舟こぞりて泣きにけり」と「をとこ」一行のみならず、渡し守を含めて涙する情景は、和歌の表現が誰彼を問わず心情を揺さぶる存在であることを示していよう。一連の流れとして捉えるとき、和歌が場面の要であると同時に、物語全体の展開の上でも重要な位置付けがなされている。物語場面は和歌によって切れつつも続いているのが第9段の構成なのであり、このような理解によって「歌物語」としての意味も充足されるであろう。

#### 5. 小 結

『伊勢物語』は章段によって部分的に難解な表現が存するけれども、比較的短く簡潔な表現で書かれ、章段毎にある程度の完結性を持つ。また内容も恋愛に関わる章段が教材化されており、内容の把握がしやすい傾向にある。これが長編の切り出し教材と較べて読みやすい印象を生徒たちに与えるのではないか。その一方で和歌が章段の内容・主題と密接に関わることから和歌解釈、とりわけ和歌に用いられている修辭に対する理解をどのように深めるべきかという問題に突き当たる。

教科書に所載されている『伊勢物語』教材の中でも、第9段は長文に属する章段である。いくつかの場面は和歌によって括られながらも、なお全体として一つの物語としての展開をなしている。そうした視点を見落としてはならないだろう。すでに述べたように切れながらも続く物語として第9段はある。この切れと続きのいずれもが和歌によってなされているのである。そうした和歌の役割を、修辭に着目して確認させてゆくことも、全体の把握において重要な意味をなしているだろう。和歌の機能・修辭・内容に重点を置いた実践が盛んに行われてよいように思われる。しかも和歌に着目した学習活動は、「歌物語」というジャンルを代表する作品であることが生徒に

も強く意識付けられることになるはずである。つまり、作品（教材）に適した課題をより精選する必要に迫られているのではないか。

文法事項や語句の意味を理解することに中心を置くあまり、教材の表現が分断されてしまい、本来の姿を見失っていることがある。個々の詳細な文法をすべて理解しなくてもある程度の文脈理解は可能であろうから、微細な分析を踏まえて巨視的な観点から把握を試みることも必要であろう。

和歌によって内容・主題を展開させる「歌物語」であれば、散文の理解以上に和歌に対する理解が重要な位置を占める。和歌を中心にした学習では、すでに確認してきたように「からころも」の歌に課されていた修辞は軽減されてよいように思う。そうした修辞理解の軽減によって、個々の和歌が表現している主人公の心情や物語の展開が「旅の心」とどのように関連しているのかを考える機会を与えることになる。また「ときしらぬ」の歌では「旅」と「都」、そして「あなか」との関係について学習を深めることも可能となろう。

古文、なかでも和歌（短歌）は日常の言語生活において意思伝達手段として頻繁に用いられるとは言えないながらも、今なおその命脈を保つ。これは基本となるリズム（5音・7音）を持ち、さまざまな言語現象で、この形式が用いられていることにあるのだろう。断片的ではあるが和歌（短歌）によって形成された言語表現が日常生活の中には確実に存在している。古文は現在の生活と乖離した存在なのではなく、連続する時間の中にあるものと認識しなくてはならない。そうした動機付けに和歌（短歌）は貴重な位置にあるように思われる。

## 注

- (1) 杉村修一氏「中学校・高等学校における古典教育の研究―「学び方」としての学校間連携―」（平成16[2004]年度、信州大学大学院教育学研究科学位論文）の調査に基づく。
- (2) 中学校国語教科書で『徒然草』序段を取り上げるのは次の4冊である。「2 東書・国語801」（236段を教材とし、「序段」は出典解説で取り上げる）、「11 学図・国語802」（89段、109段を教材とし、序段は「参考」として取り上げる）、「17 教出・国語804」（45段、92段を教材とし、序段は出典解説の中で取り上げる）、「38 光村・国語805」（11段を教材とし、序段は出典解説で取り上げる）。いずれも平成15年度版による。
- (3) 教科書を取り上げる場合には、3桁の教科書番号を用いて示す。教科書番号と教科書名・出版社は次の通り。[001] 新編国語総合・[002] 精選国語総合・[004] 国語総合古典編（以上、東京書籍）・[006] 高等学校国語総合古典編・[007] 新編国語総合（以上、三省堂）・[008] 国語総合・[009] 新国語総合（以上、教育出版）・[010] 国語総合・[011] 新編国語総合（以上、大修館書店）・[012] 精選国語総合・[013] 新編国語総合（以上、明治書院）・[014] 国語総合（右文書院）・[015] 国語総合・[017] 精選国語総合古典編（以上、筑摩書房）・[018] 高等学校国語総合（旺文社）・[019] 高等学校国語総合・[020] 高等学校標準国語総合・[021] 高等学校新編国語総合（以上、第一学習社）・[022] 展開国語総合・[024] 探

求国語総合古典編（以上、桐原書店）。なお、調査で使用した教科書は全て平成15年度版である。

- (4) 単元名は付されておらず、現代文分野からの通し番号の下に作品名を掲げる体裁を取る。作品は『竹取物語』であることから、便宜上「[物語]」の単元名を付した。
- (5) 随筆を軍記とあわせて単元として物語の後に置く教科書もある（[017] など）。この場合は年代を考慮した単元設定になっていると考えられる。年代を重視するか、ジャンルを重視するかで単元の構成には微妙な違いがある。ただし、ジャンルでの単元設定が基本であることは各教科書で共通する。また [004] では全6単元の第5単元に「物語」が設定されている。第4単元は「軍記」で平家物語が収載されており、最後の単元は「詩歌」となり、後者の単元につなげるための単元構成と捉えることができよう。
- (6) 小松英雄氏「和歌の表現と解釈」（『例解古語辞典第3版』三省堂、1992年11月初版）で概略が示され、さらに『日本語書記史原論[補訂版]』（笠間書院、2000年2月）、『仮名文の構文原理[増補版]』（笠間書院、2003年6月）において更に考察が深められている。
- (7) 単元配列を問題としており、和歌修辭のコラム欄などを先取りして『伊勢物語』で学習することは十分にあり得ることであり、実際の授業でもそのように行われている場合がある。
- (8) 他の作品ジャンルとあわせて単元化されている場合は、その単元を示してある。そのため、教材として和歌作品が扱われていない教科書が2冊あることになる。
- (9) 『伊勢物語』所載和歌の修辭について、修辭の指摘数が比較的多い『新潮日本古典集成』（渡辺実氏校注、1976年）では「大淀の……」（第75段）「岩間より……」（同上）の2首が、序詞・掛詞・縁語を用いると理解する。また『古今和歌集』でも業平作品の修辭は掛詞・縁語が用いられている程度にとどまる。
- (10) 小松英雄氏「紫色に染めあげた旅の心—『伊勢物語』、「からころも」の和歌表現を解きほぐす—」（『ユリイカ』4月臨時増刊号、第35巻第7号（通巻477号）2003年4月）
- (11) 「物名（ぶつめい・もののな）」は歌学用語の1つ。『和歌大辞典』（明治書院）では次のように解説される。「隠題とも。物の名をその意に関係なく詠み込んだ歌。（中略）歌の本質である感動の表現よりは、いかに巧みに物の名を詠み込むかの技巧に中心がある。したがって、与えられる題は音数の多い物、複数の物、一文を読み込む例さえある。（中略）古今集・拾遺集・千載集では部立の一となっている。（以下略）」（執筆：山口博氏）
- (12) 以下に引用する歌合本文は尊経閣文庫十卷本を用いる（『新編国歌大観』所収）。解題にもあるように、この本文には歌合に組まれた歌のみならず、あわせられなかった沓冠歌、折句歌、さらに後宴に列席した人々の和歌がおさめられている。折句が用いられている和歌は、いずれも歌合に組まれていないという特徴を持つ。
- (13) 次のような和歌が残されている。
- をるひとを みなうらめしみ なけくかな てるひにあてて しもにおかせし  
「をみなへし」を完全に詠み込んではいないものの、各句の上下を「をみなてし」の五文字

でそろえており、用件は満たされている。

- (14) 『和歌大辞典』(明治書院, 1986年)では「歌合」を「左右に分かれた集団から一首ずつ歌を出して二首一番の取組を作り, それぞれの番(つがい)に勝負をつける文学的遊」(執筆: 田中喜美春氏)と定義する。
- (15) この文言は, 歌合の後に催された後宴(歌合の後に開かれた宴席)での作であることを示す。
- (16) 伊藤博氏「長意吉麻呂の物名歌」(『萬葉集の歌人と作品』上, 古代和歌史研究3, 塙書房, 1975年)
- (17) 注10小松英雄氏先掲論文参照。
- (18) 片桐洋一氏『歌枕歌ことば辞典 増補版』(笠間書院, 1999年)
- (19) 「からころも」を枕詞と解した場合, 被枕詞「き」は「着」と「来」の掛詞と理解できる。その意味では, 被枕詞が掛詞で展開する形式にあうようであるが, 掛詞で展開した内容が以下の文脈に直接的に接続しておらず, 他の枕詞「からころも」での掛詞の用法とは異なる。また近時の注釈書等では「からころも」を枕詞と理解するか否かは教科書と同様にほぼ半数に分かれる。
- (20) 坂本信幸氏「紀伊の人麻呂歌四首」(『セミナー万葉の歌人と作品』第2巻, 和泉書院1999年), 神野志隆光氏「卷四・四九六」(『セミナー万葉の歌人と作品』第12巻, 和泉書院2005年)参照。
- (21) 景物としては「水ゆく川の蜘蛛手なれば, 橋を八つ渡せるによりてなむ, 八橋と言ひける」という描写があるけれども, 和歌の表現に取り込むには馴染まないだろう。
- (22) 初二句を序詞と理解するのは, 『伊勢物語』では『伊勢物語(講談社文庫)』(森野宗明氏校注, 1972年)『新潮日本古典集成』(渡辺実氏校注, 1976年)『新日本古典文学大系』(秋山虔氏校注, 1997年), 『古今和歌集』では『日本古典文学全集』(小沢正夫氏校注, 1971年)『新潮日本古典集成』(奥村恒哉氏校注, 1978年)『新編日本古典文学全集』(小沢正夫・松田成穂氏校注, 1994年)『古今和歌集全評釈』(片桐洋一氏校注, 1998年)などがある。かたや序詞と解さないのは, 『伊勢物語』では『日本古典文学全集』(福井貞助氏校注, 1972年)『新編日本古典文学全集』(福井貞助氏校注, 1994年), 『古今和歌集』では『新日本古典文学大系』(小島憲之・新井栄蔵氏校注, 1989年)などがある。
- (23) 『古今集の世界 増補版』(塙書房, 1961年)
- (24) 注10小松英雄氏論文参照。
- (25) 注10小松英雄氏論文参照。
- (26) 『伊勢物語の世界(放送ライブラリー24)』(日本放送協会出版, 1978年)参照。
- (27) [019] [020] [021] の学習課題として掲げられている項目である。
- (28) 『伊勢物語論—文体・主題・享受—』(笠間書院, 2001年)